

アナトリア語派の方言的諸相

大 城 光 正

岡山理科大学教養部

(昭和54年9月21日 受理)

I はじめに

アナトリア語派には、ヒッタイト語、パラ語、ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、リュディア語が含まれる。ヒッタイト語 (Hit) は、ヒッタイト王国の都が存在したボアズキョイ (現在のトルコ共和国に位置する小さな部落) から出土する粘土板文書で占められており、前17世紀から前13世紀に亘る資料を提供している¹⁾。資料は他言語に較べて多く、研究も一番進んでいるように思われる。パラ語 (Pal) とルウィ語 (Luw)²⁾ も、ボアズキョイから出土する粘土板文書で占められ、Pal は前17世紀から前14世紀、Luw は前15世紀から前13世紀に亘る資料を提供している。上記の3言語は楔形文字で記されている。象形文字ルウィ語 (Hier)³⁾ は、ヒッタイト王国滅亡 (前1200年頃) 後にルウィ系の残留民によってうちたてられた小国家の遺跡 (東南トルコから北シリア地方が中心) から出土する碑文が中心である。同碑文は前10世紀から前8世紀に亘る資料で占められている。ただ、象形文字自体は楔形文字と共にヒッタイト王国時代から使用されており、同文字が楔形文字と併記された国王印章等において確認される。リュキア語 (Lyc) とリュディア語 (Lyd)⁴⁾ は、トルコ西部エーゲ海沿岸地方から出土する碑文が中心で、前7世紀から前5世紀に亘る資料を提供している。両言語は時代的に新しいことから、Hit, Luw, Pal と較べて、かなりの言語的改新が推察される。

上記の6言語はアナトリア語派として、印欧語族の一分派を形成している⁵⁾。同語派に含まれる言語はかなり古期の言語層を提示しているために、印欧語研究に有力な徴証を提供するものと推察されるが、個々の言語研究や語派としての比較研究は十分なされていないのが現状である。そこで、本稿において、印欧語族におけるアナトリア語派の位置づけ究明のために、まず、上記の諸言語の方言的特徴を比較検討することによって、同語派の系統的關係を考察してみたい。

II Hit, Pal, Lyd と Luw, Hier, Lyc の二区分について

厳密に言語学的な観点から言語の方言的变化相を把握するには、いわゆる等語線 (isogloss) の東によってしかとらえることはできない。上記諸言語の時代的差異は認めざるを得ないが、印欧語の方言研究と同様に、方言的特徴が時代の推移の中で空間的な拡がりの上に投影されたものとしてとらえるならば、個々の方言的特徴の分布状態を検証するこ

とによって、同語派の方言的様相が明らかになると思われる。

そこで、同語派の個々の方言的特徴を比較すると、Hit, Pal, Lyd (Hit グループ) と Luw, Hier, Lyc⁶⁾ (Luw グループ) の間に明白な方言的区分が在証される。以下において、同方言区分を示唆する諸特徴を例示してみたい。

(a) 名詞 a/i 語幹

名詞語幹において、Hit グループは a 語幹、Luw グループは i 語幹が優位を占めている：Hit. *atta-*, Pal. *papa-*, Lyd. *ata-*⁷⁾ : Luw. *tati-*, Hier. *tati-*, Lyc. *tedi-* 《父》; Hit. *anna-*, Pal. *anna-*, Lyd. *èna-* : Luw. *anni-*, Hier. *Ana-*⁸⁾, Lyc. *èni-*, 《母》; Hit. *nana-* : Luw. *nani-*, Lyc. *nèni-* 《兄弟》等。印欧語の母音 *o, *a が Hit の母音 a に対応する (例. Gr. *προ*, Lat. *pro*, Skr. *pra-*, OChSl. *pro-*, Hit. *para* 《前に》; Gr. *ἀπό*, Lat. *ab*, Skr. *apa*, Hit. *appa* 《〜から》等) という例証から、印欧語 o 語幹名詞 (例. Gr. *ἵππος*, Lat. *equus*, Skr. *áśvas* 《馬》) や ā 語幹名詞 (Gr. *θεά* 《女神》 Lat. *via* 《道》 Skr. *áśvā* 《牝馬》) が Hit. a 語幹名詞に対応することが推察される⁹⁾。そこで、Luw. グループの i 語幹名詞の優位は、印欧語 *o 語幹名詞と *ā 語幹名詞が Proto-Anatolian で a 語幹名詞を形成し、さらに Luw グループにおいて i 語幹名詞に改新したことを示唆している¹⁰⁾。

(b) 名詞 Pl. Nom 語尾 *-es

印欧語 Pl. Nom 語尾 *-es は、Hit グループの通性語尾 (Hit. *-es*, Pal. *-es*, Lyd. *-is*) において保存されている。Luw グループでは、Luw. *-nzi*, Hier. *-ai*, Lyc. *-a/-i* の如く、統一的な形態は見出せない。特に、Luw. *-nzi* 語尾 (例. *tati-*, Pl. *tatinzi* 《父》; *mas-sani-*, Pl. *massaninzi* 《神》等) は印欧語 collective 要素の接尾辞 *-nt- の保持を示唆している。同要素は Hit の collective 名詞形成の接尾辞 *-ant-* (例. *utnē-* 《国土, 土地》 *utnēyant-* 《(集合的な意味で) 国土》; *tuzzi-* 《兵士》 *tuzziyant-* 《軍隊》; *parn-* 《家》 *parnant-* 《家政》等) にも対応するものと思われるが、*-ant-* 要素の詳細な機能はなお不明である¹¹⁾。

(c) 接尾辞 -(a)ssi-

一般に所有関係を表現するためには、名詞属格 (所有属格の用法) が使用される。Hit. Pal では属格語尾 (*-as*) が認められる¹²⁾。Luw グループの所有関係は、Luw. *-(a)ssi-*, Hier. *-(a)sa-*, Lyc. A. *-(a)hi-*, B. *-(a)si-* の接尾辞によって表現される。Lyc は A. B の二方言に細区分されるが、s 音 > h 音の変化の如く、B 方言が A 方言より古い言語層を示している：Lyc. A. *ehetesi* : B. *esetesi* ; A. *kbih* : B. *tbisu* 等。Luw グループに認められる *-(a)ssi* 接尾辞は、*-nth-*, *-nd-* 要素と共にルウィ系民族がギリシャ民族の登場する前のエーゲ海上の島々やギリシャ本土にも活発な植民活動を行ったことを推察させる在証と考えられてきた：同要素を保存する地名。Dattassa 《ルウィの嵐神 “Dattas” の町》; Parnassa 《“家 (parna)” のある、宮殿のある場所》等が見出せる。Hit グループには同

要素を見出すことはできないが、Lyd において、kaveś bakillis 《バックカスの神官》の如く、-(a)ssi に相応する所有形容詞形成辞 -lis が認められる。同 -il 要素は Hit 副詞形成辞 -ili (luili 《ルウィ語では～》；hattili 《ハッティ語では～》) や Pal 形容詞形成辞 -ala, -ali (halpiyala, kuliwalis, tilila 等) に対応するものである。本来、同要素は先住民族の言語ハッティ語の所有接尾辞 -il, -el からの影響であり、このことは Hit グループにハッティ語の基層的な特徴が見出せると言える¹⁴⁾。ただ、Pal は Luw グループに認められる -(a)ssi 要素に対応する -sa 要素も認められる。このことは時代的に Pal が Hit だけでなく、Luw の影響も受ける位置に存在していたと思考され、アナトリア語派における Pal の言語的位置に問題を投げかけている。

(d) -nt-/-mo- 分詞

nt 語幹による動形容詞はすでに共通基語時代に分詞の段階に達していたと思われ、アナトリア語派では、Hit. -ant, Pal. -ant の形において認められる：Hit. kuen-, kunant- 《殺す》；ep-, appant- 《取る》；Pal. suwa-, suwant- 《満たす》；hā-, hanta- 《暖かくなる》等。Luw グループには -ant 要素は見出せないが、印欧語の Medium 分詞を形成する *-meno-, *-mno- 語幹から導き出された *-mo- 要素¹⁵⁾ が認められる。同要素は Luw. -mmi-, -ma-, Hier. -ma-, -mi-, Lyc. -aimi-, の形において受身分詞を形成する語幹を提示している。また、同要素は Pal -mmi- においても見出せ、Luw からの影響が示唆される。同形態はバルト語派 -ma-, スラブ語派 -mo-, アヴェスタ -mna- の形に近いものである。

(e) 反復態 sk 接尾辞¹⁶⁾

印欧語の反復態 (iterative) を示す接尾辞 sk は古く共通基語時代に遡るものと思われる。アナトリア語派に含まれる諸言語においても、Hit. -sk-, Pal. -sk-, -sa-, Luw. -s-, -ss-, Hier. -s(a)-, Lyc. -s- の形態を保存している。Lyd の形は解明されていない：Hit. pai-, pisk- 《与える》；Pal. piya-, pisa-；Luw piya-, pipissa-；Hier. pia-, pipisa-；Lyc qāti, qastti 等。Luw グループの k 音消失は、Hit. nakkes-：Luw. nahhuwa- 《重くなる》、Hit. maninkuwant-, Luw. mannahuwan- 《短い》；Hit. kessera-, Luw. issari-, Lyc. izre- 《手》、Hit. ki-, Hier. i- 《これ》などから推察されるように、本来変化しやすいものであったようだ。

(f) 前接的接続詞

アナトリア語派に見られる前接的接続詞は、Hit グループと Luw グループそれぞれに特有の形態を有している。

《and》 Hit. -(y)a, Pal. -(y)a, Lyd. -a：Luw. -ha, Hier. -ha, Lyc. -ke

《and》 Hit. -ku, Pal. -ku, Lyd. -k¹⁷⁾

《but》 Hit. -ma, Pal. -ma, Lyd. -m：Luw. -pa, Hier. -pa-, Lyc. -be, -pe (ただし、Pal. -pa, Lyd. fa- も見出せる。)

ただ、上記以外の接続詞においては明白な区分といえる徴条は見出せない。むしろアナトリア語派の諸言語が有する接続詞は相互に影響し合って、同語派特有の形態を保持しているようにも思われる：接続詞 a- : Pal, Lyd (ak), Luw, Hier に保持；接続詞 nu- : Hit, Pal, Hier に保持；接続詞 su : Hit, Lyc (se?) に保持；接続詞 ta- : Hit；接続詞 na- : Hit (*na-), Lyd (na-, nak) に保持, Luw (na-)；接続詞 ma- : Lyc (me), Pal (mas) に保持¹⁸⁾。

以上の如く、Hit, Pal, Lyd と Luw, Hier, Lyc の間に存在する有力な方言的特徴を挙げることが出来る。

Hit グループ…………… a 語幹名詞の優位；印欧語 Pl. Nom -*es 語尾の保存；ハッティ語 -il 要素の保存；-nt 語幹, iterative -sk (*-sk) 接尾辞の保持。

Luw グループ…………… i 語幹名詞の優位；所有形容詞 -(a)ssi 接尾辞の保持；受身分詞 -mo 語幹, iterative -ss (-*sk) 接尾辞の保持。

上記の諸特徴の中で、Luw グループにおける Pl. Nom- *es 語尾の消失, a 語幹から i 語幹への改新, -sk>-ss への変化, 属格語尾の衰退(代わりに -(a)ssi 接尾辞の発達)の指摘から、Luw グループは言語的改新が著しかったことが推察される。ただ、グループ間の言語的近親性は Luw グループの方が強いように思われる。同近親性は一部の学者による Luw を Cuneiform Luwian, Hier を Hieroglyphic Luwian, Lyc を Alphabetic Luwian という呼称¹⁹⁾からも推察される。今後、Hier, Lyc の言語的解明によって、より詳細な近親関係が確証されると思われる。

III アナトリア語派における Hit の位置

前章で考察した如く、Hit, Pal, Lyd と Luw, Hier, Lyc の間に著しい方言的差異が指摘された。さらに、アナトリア語派の中で、Hit にのみ認められる特有な言語形態が指摘される。それは多量な文書が発見されて、アナトリア語派に属する諸言語の研究が Hit 研究から始まり、一番進んだ状況にあることと、言語的にも古い言語層を示していることに基づいている。印欧語の比較研究において Hit の例が引用されるのはそのためである。そこで、アナトリア語派における Hit に特有な言語的特徴を列挙してみたい。

(a) 母音交替 (Ablaut) の保存

印欧語には母音交替を伴う名詞や動詞が存在する。Hit においても、母音交替を伴う名詞や動詞は名詞や動詞の形成上 productive な機能を有していると思われる：Hit. ais/issas (属格)《目》；pir/parnas (属格)《家》等。また、共通基語時代に遡ると思われる r/n 語幹 (heteroclitica) 名詞 (Gr. ἥπαρ/ἥπατος (属格)《肝臓》；Lat. iecur/iecinis (属格)；Skr. yákr-t-/yaknás (属格)) を Hit は保存している：Hit. eshar/eshanas 《血》；watar/wetenas 《水》；pahhur/pahhuenas 《火》等²⁰⁾。母音交替の動詞は Hit. ed-/adanzi (Pl. 3)

《食べる》; kuen-/kunanzi 《殺す》; ep-/appanzi 《取る》の如く, Pl. 3. 現在形に見出せる。Hit 以外の諸言語は母音交替を伴う名詞や動詞を所有していない: Hit. pir/parnas 《家》: Luw. parna-, Hier. parna-, Lyc. pr̄nawa-, Lyd. bira- の如く, 単なる母音語幹(主に a 語幹)に改新している。

(b) 動詞の活用変化

Hit の動詞には mi 活用動詞と hi 活用動詞の二体系を所有している²¹⁾。mi 活用は印欧語の第一次語尾活用に相当するものである。hi 活用は印欧語の完了の語尾活用に対応するものであるが, 印欧諸言語の完了の体系が十分継承されていないために詳細は不明である。一般に完了の体系は消失しやすく, Hit の hi 活用についても衰退傾向が示唆される。同根拠として, hi 活用の複数語尾が mi 活用と同形になっていること, hi 活用に属する動詞が数的に少なく, 後期資料では hi 活用/mi 活用の混同や mi 活用への交替傾向が挙げられる。Hit 以外の言語でも Hit の hi 活用語尾を提示する -i 語尾 (Sg. 3. 現在形) が僅少なから認められることから, 従来 hi 活用語尾体系を保持していたことが推察される: (例) Pal. m̄s-i 《満足する》; Luw. muwa-i 《?》; Hier. hurta-i 《呪いをかける》²²⁾。しかし, Hit の hi 活用動詞が mi 活用動詞と共に, 動詞体系を形成しているのに対して, Pal, Luw, Hier における hi 活用が体系的に確立していたという例証としては乏しいものと言える。

(c) 文小辞について²³⁾

Hit の特徴として, 文頭要素に付加される多様な文小辞が挙げられる。Hit の文小辞は, kan, san, (a)sta, (a)pa, an を有する。それぞれの小辞の機能は記述された話題性のある対象が場所, 運動の方向などといかに関与しているかを暗示するものと考えられる。小辞 kan は運動の方向的な主体関与の求心性, 小辞 (a)sta は分離, 起点的な遠心性, 小辞 san は場所明示の終点的帰着的な関与を強く示唆するものである。小辞 (a)pa, an は古期ヒッタイト語にのみ散見されるもので, 資料的に数も少なく, 体系的な論究は今後に俟たねばならない。通時的には小辞 kan が優位を占め, 後期ヒッタイト語資料では他の小辞はほとんど認められない。それ故, これらの小辞の機能は古いヒッタイト語資料においてのみ productive であったと言える。

Hit. 小辞 kan に対応する他言語の小辞は, Pal. -(n)ta/-tta, Lyd. -(i)t, Luw. -tta, Hier. -ta, Lyc, -te である²⁴⁾。Hit. 小辞 san に対応するものは, Luw. -tar のみである。起源的には, Hit の小辞群と他言語の小辞の間には相違した発達過程が示唆される。ただ, 上記のアナトリア語派に認められる小辞は印欧語要素の継承ではなく, アナトリア語派特有の小辞体系といえる。

(d) 音変化

印欧語 *e 母音は一般に Hit では保存されているが, 他言語では a に変化している: Hit. esdu: Pal. asdu, Luw. asdu, Hier. asdu 《es- “be 動詞” Sg. 3. Imp》; Hit. ed-:

Luw. ad- 《食べる》; Hit. eku- : Pal. ahu-, Luw. akuwa- 《飲む》等。しかし, *t 音は Hit において著しい音的な変化が見出せる。*ti, *nti 音は Hit. ts 音 (表記 -zi, -nzi) に改新している : Hit. aniyanzi : Luw. anniti 《行く》; Hit. adanzi : Pal. atanti 《食べる》; Hit. iyazi : Hier. aiati, Lyc. edi 《作る》; 再帰的小辞。Hit -z(a) : Pal. -ti, Lyd. -it, Luw. -ti, Hier. -ti, Lyc. -ti/-di 等。また, 同化の例として, *tn > nn : Luw. haratna, Hit. harannas; *tm > mm : Luw. katmars, Hit. kammars 等が挙げられる。Hit は音に関しては表記上の不備 (母音 o の表記が存在しないことや有声音と無声音の区別 (t/d, k/g, p/b) が曖昧) のために音韻組織の再構はむずかしい状況にある。ただ, Hit は音的な一部の改新を除けば, アナトリア語派の中で一番古い言語層を提示していると言える。

IV Lyd, Lyc の言語的改新

アナトリア語派の中で, Lyd, Lyc は Hit, Pal, Luw, Hier に較べて時代的に後期の言語資料を提供している。Lyd は Hit, Pal と Lyc は Luw, Hier との近親性が指摘されるが, 両言語を一グループとして他言語と比較すれば, いくつかの共通の言語的改新が認められる。以下においてその特徴を取り上げてみたい。

(a) *k^w → p-, t- の変化

印欧語の方言的様相の把握として, gutturales の対応は重要な規準を提供している。*k 音は東方諸言語において口蓋化された形 (s, š) で現われ, centum/satəm の二大区分を措定させている。*k^w 音 (labio-veleres) は東方諸言語では単なる k 音か口蓋化された形 (s, š) になっているが, 西方諸言語 (centum 群) では Lat, ku-, Hit. ku-, やその変形, オスク語 p, Gr. p, t, の形が見出せる。アナトリア語派では, 上記の Hit. ku- の如く, Pal. Luw. Hier. も ku- 音で現われ, Lyd. p-, Lyc. t- 音と相違を示している : Hit. kuis, Pal. kuis, Luw. kuis, Hier. ku-(a)s, Lyd. pis, Lyc. ti 《(関係代) who》等。Hit 等の言語が口蓋音 k と両唇音 w の二要素を有しているのに対して, Lyd p- は口蓋音の要素を失って唇音の要素のみを保持し, Lyc. t- は, 口蓋における閉鎖位置が i 音に引かれて前方に動き, 歯音の位置に移って t 音を有している²⁵⁾。

(b) laryngeals の欠除

アナトリア語派に含まれる言語の古い特徴を示すものとして, 他の印欧語において消失した古い喉頭音の保存が挙げられる²⁶⁾ : Hit. hanti, Gr. ἀντί, Lat. ante 《前に》; Hit. hastai, Luw. hassa, Gr. ὀστέον, Skr. asthi, Lat. os 《骨》; Hit. pahhur, Gr. πῦρ 《火》等。Hit では語頭に位置する h 音 (Hit. harkis, Gr. ἀργίς 《白い》; Hit. hassa, Lat. āra 《灰》等) と語中に位置する -h-, -hh- (Hit. mehur, Got. mēl 《時》; pahhur, Gr. πῦρ 《火》等) が存在し, 少なくとも表記上二種類の喉頭音 (h, hh) が指定される。ただし, Hit の喉頭音は現れる場所に関して印欧語の理論どおりに現われてはおらず, すでに Hit においても消失された喉頭音が存在していた可能性もある : Hit. eszi, Lat. est 《〜である》; Hit.

appa, Lat. ab, Gr. ἀπό 《～から》等。

Lyd. Lyc においては Hit. Luw 等に保存されている喉頭音が認められない。Lyd. āntē-, Hit. Luw. handa(i)- 《秩序づける》; Lyd. lailas, Hit. lahhiyalas 《勇士》, Lyc. esede <*ashata) Hit. eshar, Luw. asha(r) 《血》の如く、両言語では消失した例が認められる。また、Lyc には, χñtawata, Hit. hantezzi- 《第一の, リーダー》; zχχāte, Hit. zahhiya- 《戦う》; laχadi, Hit. lahiyai 《打つ》の如く、ギリシャ語 χ 音 (=kh 音) でもって表記されている例が認められる。しかし、両言語が古い印欧語の喉頭音を保存していた確証は見出せない。

(c) 前置詞の発達

Hit. Pal. Luw. Hier には前置詞が存在せず、後置詞が見出せる: Hit. anda, Luw. anta /anda, Hier. a(n)da 《～の中に》; Hit. appa(n), Luw. appa(n), Pal. appa(n), Hier. apa(n) 《～の後に》等²⁷⁾。後置詞を有する言語は統語構造的には SOV 型に含まれる。Lyd には, sirmaλ ēn 《神殿の中に》の如く、後置詞 ēn を持つと同時に, ist esλ vānaλ 《この墓の中に》の如く、明らかに前置詞の機能を有する ist 《～の中に》が認められる。Lyc においても, ēnē 《～の下に》, Luw. annan²⁸⁾; ese 《～と共に》; ēti 《～のために》などの前置詞の機能を有する語が見出せる。両言語の後置詞から前置詞的な機能への移行はアナトリア語派において継承されてきた SOV 型の統語構造から SVO 型の統語構造への移行を示唆するものと思われる²⁹⁾。

以上の如く、Lyd は Hit グループ、Lyc は Luw グループに含まれるが、両言語は共に時代的に新しく、それぞれ独自の言語変遷を経てきた結果、いくつかの類似の言語的改新を行なったことが理解される。

V おわりに

アナトリア語派には印欧語の centum/satəm 方言群に相当するほどの明白な方言的徴条は見出せないが、Hit グループ (Hit, Pal, Lyd) と Luw グループ (Luw, Hier, Lyc) の二方言群に分けられるべき有力な方言的諸特徴が指摘される。特に Luw グループは種族的に Luw 系民族として一つにまとめられ、言語的にも Luw > Hier > Lyc への時代的変遷を示唆している。ただ、全体的に同グループは Hit グループよりも言語的改新が著しいように思われる。Hit は同語派の中で最古の言語的特徴を有し、印欧語比較研究において重要な資料を提供している。Pal は Hit グループに含まれ、Hit, Lyd と近親の関係を有しているが、-mmi 受身分詞, iterative. -sa 接尾辞 (-*sk). -sa 形容詞形成接尾辞 (Luw, -(a)ssi) の特徴は Luw からの影響を示すものと思われる。Lyd, Lyc はそれぞれ Hit グループ、Luw グループと方言群の相違はあるが、両言語に特有の言語改新(前置詞の存在, laryngeals の消失等)が認められる。今後、アナトリア語派の系統的關係の把握のためには、Hier, Lyd, Lyc の十分な言語的解明などによって、より詳細な方言的特徴の分析が

必須なように思われる³⁰⁾。

註

- 1) 研究資料として, J. Friedrich, *Hethitisches Elementarbuch I. Teil (Kurzgefaßte Grammatik)* Heidelberg (1960) 以下 HE. I と略; H. Kronasser, *Vergleichende Laut- und Formenlehre des Hethitischen*. Heidelberg (1956); E. H. Sturtevant, *A Comparative Grammar of the Hittite Language*, New Haven (1951).
- 2) Pal 資料: A. Kammenhuber, *Das Palaische*, *RHA* XVII (1959) Fasc. 64; 同上, *Esquisse de Grammaire Palaite*, *BSL*. LIV (1959) 18—45頁; O. Carruba, *Das Palaische, Texte, Grammatik*, *Lexikon, StBoT 10*, Wiesbaden (1970); 同上, *Beiträge zum Palaischen*, Istanbul (1972)。Luw 資料: J. Friedrich, 上掲書, *Zur luwischen Grammatik* 183—195頁; E. Laroche, *Dictionnaire de la langue louvite*. Paris (1959) *Esquisse de grammaire louvite* 131—145頁; H. Otten, *Zur grammatikalischen und lexikalischen Bestimmung des Luwischen*, Berlin (1953)。
- 3) 象形文字ルウィ語資料: P. Meriggi, *Manuale di eteo geroglifico, Parte 1*, Grammatica, Roma (1966) 参照。
- 4) Lyd 資料: R. Gusmani, *Lydisches Wörterbuch. Grammatische Skizze*, Heidelberg (1964) 30—48頁; O. Carruba, *Studi in Onore di P. Meriggi. Zur Grammatik des Lydischen*, Roma (1969) 39—83頁; A. Heubeck, *Lydisch. Altkleinasiatisch*, *HdO*. II. 397—427頁, Lyc 資料: Ph. H. J. Houwink ten Cate, *The Luwian Population Groups of Lycia and Cilicia Aspera during the Hellenistic period*, Leiden (1965); G. Neumann, *Lykisch. Altkleinasiatik*, *HdO*. II 358—396頁参照のこと。
- 5) 同語派の言語的位置として, Jaan Puhvel, *Dialectal Aspects of the Anatolian Branch of Indo-European in Ancient Indo-European Dialects*, Los Angeles (1966) 235—247頁; A. Kammenhuber, *Zur hethit. -luw. Sprachgruppe*, *KZ* 76. (1962) 1—26頁; 同上, *Hethitisch, Palaisch, Luwisch und Hieroglyphenluwisch. Altkleinasiatik. HdO*. II 119—357頁。
- 6) 特に Luw グループへの Lyc 確証として, E. Laroche, *Comparaison du louvite et du lycien*, *BSL* 53 (1957—1958) 159—197頁 and 55 (1960) 155—185頁参照のこと。
- 7) A. Heubeck, *Die Sprache* VI (1960) 208頁; O. Carruba, *ZDMG* 111 (1961) 460頁において Hit. *atta-*《父》との関係を指摘, 反対意見として, R. Gusmani, 前掲書 (1964) 69頁, *Lyd. taada-*《父?》同書 207 頁において Luw グループの **tati/a-* との関係を示唆している。
- 8) P. Meriggi, *Hieroglyphisch-Hethitisches Glossar*. Wiesbaden (1962) 26頁: *Katuwa* の“女性”又は“母”の意味を有する人名(?); E. Laroche, *Les hiéroglyphes hittites*, Paris (1960) 46頁: 単なる女性名 *Ana*。
- 9) H. Kronassar, 前掲書 (1956) 99—109頁; A. Kammenhuber, 前掲論文. *HdO* II. 279—280 頁。
- 10) Luw. *tati/tati-ya-*, *anni/anni-ya-*, *nani/nani-ya-* の如く, *-ya-* の付加による a 語幹化が認められる。これは Hit. *i* 語幹名詞の *-ya-* による名詞化 (J. Friedrich, 前掲書 (1960) § 67) と同傾向を示していると思われ, *i/ya* 語幹名詞の混同を示唆している。
- 11) J. Friedrich, *HE. I* § 48; 岸本通夫, *Remarques sur l'élément suffixal -nt- de l'Indo-Européen*, 神戸大論叢 IX/3 (1959) 123—134頁。
- 12) 拙稿, ヒッタイト語における名詞の属格用法, 理大紀要 14 (1978) 131—142頁。
- 13) G. Neumann, 前掲論文 *HdO*. II. 373頁, 379頁。
- 14) A. Kammenhuber, 前掲論文 *HdO* II 270—271頁; 同上, *Hattisch. HdO* II. 460頁。
- 15) **-mo-* 形は Proto-Anatolian **-amna->*-ma-* の同化とも考えられる。また, Hit における人

- 種等を示す接尾辞 *-umna-/-umma-* (Hattusumna-《Hattusa の人》, Suppilulium(m)a 等) との関係も示唆される: O. Szemerényi, *Einführung in die Vergleichende Sprachwissenschaft*, Darmstadt (1970) 295頁。
- 16) J. Friedrich, *HE I* § 141; W. Dressler, Die hethitischen *šk*-Formen, in *Studien zur Verbalen Pluralität*, Wien (1968) 159—253頁参照のこと。
- 17) Hit.-ku は, *-ku...-ku* 《～か又は～》という相関語句, Pal, Lyd の形は文又は語を結ぶ接続詞, Luw-kuwa が見出せるが, Hit グループの *-ku* 要素との関係は不明 (E. Laroche, 前掲書 Paris (1959) 58頁。)
- 18) 詳細なアナトリア語派の接続詞に関する研究は, O. Carruba, *Die Satzeinleitenden Partikeln in den Indogermanischen Sprachen Anatoliens*, Roma (1969) 特に103—108頁参照のこと。
- 19) Ph. H. J. Houwink ten Cate, *Anatolian Languages in A Basic Bibliography for the Study of the Semitic Languages*, Vol. I, Leiden (1973) 84—109頁。
- 20) J. Friedrich, *HE I* § 81—§ 86; A. Kammenhuber, Zur Genese der hethit. *-r-/-n-* Heteroclitica, *Corolla Linguistica. Festschrift F. Sommer*, Wiesbaden (1955) 97—106頁。
- 21) J. Friedrich, *HE I* § 145. § 150; A. Kammenhuber, 前掲論文。 *HdO. II* (1969) 313—333頁; C. Watkins, *Geschichte der Indogermanischen Verbalflexion*, Heidelberg (1969) 77—84頁。
- 22) J. Friedrich, *HE I* § 399; H. Otten, *Zur Grammatikalischen und Lexikalischen Bestimmung des Luvischen*, Berlin (1953) 45頁; 反対意見 (hi 活用の存在に疑問) として, E. Laroche, *Dictionnaire de la langue louvite*, Paris (1959) 141頁。
- 23) J. Friedrich, *HE I* § 294—§ 301; F. Josephson, *The function of the Sentence Particles in old and middle Hittite*, Uppsala (1972) 特に 1—29頁; 拙論, ヒッタイト語の小辞の研究 (修論 1975)。
- 24) O. Carruba, 前掲書, Roma (1969) 24—38頁参照。
- 25) centum/satəm の区分は等語線の束としての集約と考えるべきである。Gr. *ἑκατόν*, Lat. centum, Goth. *hund, OIr. cēt : Skr. satām, Av. satəm, Lith. šimtas, Ochs. sūto 《100》の確証において, Lyc. sñta 《100》から Lyc の satəm 方言群への可能性を論じることは出来ない。Lyd. p-, Lyc. t- 音の変化は Gr. オスク語と同様の音変化を示す。
- 26) W. Winter, *Evidence for Laryngeals*, Hague (1965) 特に, J. Puhvel, Evidence in Anatolian 79—92頁。
- 27) J. Friedrich, *HE I* § 228—§ 234; L. Zuntz, *Die hethit. Ortsadverbien arha, para, piran als selbständige Adverbien und in ihrer Verbindung mit Nomina und Verba*, Berlin (1936); F. Starke, Die Funktionen der dimensionalischen Kasus und Adverbien im Althethitischen, *StBoT 23*, Wiesbaden (1977) 127—200頁。
- 28) Luw に認められる前置詞 *annan* 《～の下に》, (Hier, an-nan) : an-na-a-an patanza 《足の下に》。Luw グループにおける前置詞的傾向と言えるかもしれない。
- 29) J. M. Greenberg, Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements in *Universals of Language*, M. I. T. Press (1966) 73—113頁; 松本克己, 印欧語における統語構造の変遷, 言語研究 68 (1975) 15—43頁。
- 30) 最近の研究によって, 象形文字音価の修正 (a > i, i > zi 等) が主張されている。(Hawkins-Morpurgo-Davis-Neumann, Hittite hieroglyphs and Luwian: New evidence for the connection, Göttingen 1974)。また, アナトリア語派に含まれる言語として, カリア語 (Caria, Karisch) も挙げられているが詳細は不明である。(B. Rosenkranz, Vergleichende Untersuchungen der altanatorischen Sprachen, Mouton (1978) 参照のこと。)

On the Dialectal Aspects of the Anatolian Languages

Terumasa OHSHIRO

Department of General Education,
Okayama University of Science
Ridai-cho, Okayama 700, Japan

(Received September 21, 1979)

This paper aims to investigate the dialectal aspects of the Anatolian languages, which were spoken in Asia Minor in the first and second millennia B. C. On the basis of their dialectal features, it can be shown that they will be divided into two groups: 1) the Hittite group (Hittite, Palaic and Lydian) which is characterized by a-stem nouns, -es pl. nom. ending, -nt participle, and -sk- iterative-suffix and 2) the Luwian group (Luwian, Hieroglyphic Luwian and Lycian) by i-stem nouns, -mo- passive participle, -(a)ssi- adjective suffix and -ss- iterative-suffix. These features indicated, it seems, make up a convincing bundle of isoglosses to divide these languages into two groups.

Such is the situation of the fundamentally attested dialectal phase of the Anatolian languages, but, of course, some dialectal elements, which should not be neglected, suggest the possibility of some other dialectal classifications. In Hittite, we can find the most archaic features of the Anatolian languages, such as r/n-stem nouns, the verbal conjugations (mi/hi) and the sentence particles. Palaic has some linguistic traits clearly influenced by Luwian, although it belongs to the Hittite group. In Lydian and in Lycian, various innovations are attested, such as the use of prepositions, the lack of laryngeals and the variation of *k^w-.

Thus the dialectal investigation of the Anatolian languages must be made more detailed by abstracting and analyzing more effective dialectal characteristics.